

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531030

研究課題名(和文)大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究

研究課題名(英文)Empirical studies on the improvement of learning will and attitude through the communication trainings

研究代表者

林 徳治 (HAYASHI, TOKUJI)

立命館大学・教育開発推進機構・教授

研究者番号：50228582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学の教養教育において開発した学習モジュールを実践し、大学生のコミュニケーション能力の改善による主体性の獲得や向上を目的とした実証研究である。

効果の検証は、学習者の情意面、生活面および学修環境面のアンケート調査を実施した。また、Facebookを活用した協調学習や教育サポーターを活用した包括的学修支援を行った。協調学習や包括的学修支援は、学習モジュールを効果的に実施することができ、学習者のコミュニケーション能力をより高めた。その結果、学修の始発性や統制感、達成感を充実させ、ひいては学修の主体的な意欲という主体性向上への足場かけに有効性が見出せた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to improve the learning will and attitude of the undergraduate students through the communication trainings. We used the following procedures. 1) To develop the communication trainings. 2) To provide the trainings with active learning in the general educational subjects in university. 3) To carry out the questionnaire surveys and inspect the training effects.

As a result, we found the cooperative learning using Facebook and the educational supporter effect for improving the communication skill among a plurality of learners. This learning style gave a high sense of unity and achievement to the learners. It clearly shows that it leads to the improvement of the learning will and attitude.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：コミュニケーション 主体性 学修 協調学習 SNS

1. 研究開始当初の背景

大学設置基準大綱化の改正に伴い、各大学では柔軟な教育課程編成が可能になった。とりわけ教養教育は、中央教育審議会答申(新しい時代における教養教育の在り方について、平成14年)において、学ぶことやより良く生きることへの主体的な態度や意欲などの育成が重視されている。しかし、人材育成の根幹となる教養教育の実施状況は、分野毎の縦断的な知識技能の教授科目(行動主義)が多く(文部科学省、平成18年度)、学ぶ目的意識、問題解決能力、学習意欲などの育成が教養段階で十分に図られているとは言い難い。さらに、教養教育の履修がその後の専門科目やゼミナール参画などに及ぼす教育効果については、評価指標の開発や経年変容の研究報告が少なく、現状から見て能動学習(構成主義)に繋がっていないことが危惧される。そのため、本研究が骨子とする大学生のコミュニケーション能力改善は、能動学習に繋がる主体性の育成及び専門教育との接続性を考慮した教養教育を考えるうえで極めて有益である。

コミュニケーション能力については、その諸要素を林(代表者)の先行研究(平成17-19年基盤研究(C)「学習者参画型授業モデル」、平成19-20年教員研修委託事業「教員研修モデル」)より継承する。先行研究の成果としてテキスト教材『必修! 相互理解を深めるコミュニケーション実践学』を出版し、大学授業及び教員研修などで活用した。また、自学自習を支援する補助教材として Web 上で利用可能なデジタルオンデマンド教材の開発・公開に至った。今後、先行研究の課題として、コミュニケーション能力の改善を図る学習モジュールの開発が必要である。さらに学習モジュールがコミュニケーション能力の改善や主体性の育成に寄与する教育効果の検証が未着手であることから、これら評価指標・尺度・基準の開発と実証が必要である。

2. 研究の目的

あらゆる学習活動の場で根幹となるコミュニケーション能力は、今日の ICT 依存の常態化や日常のコミュニケーション不足から低下傾向にあると言える。大学教育においては、学生の主体的な情報収集・論理的思考・表現伝達力の低下が必至となり、学ぶことへの意欲や態度の低下との繋がりが極めて大きい。故に、コミュニケーション能力の改善に帰する手法の開発・実証が不可欠である。

そこで本研究は、コミュニケーション能力に主眼を置き、次の2点を目的とした実証研究とする。

コミュニケーション能力を改善する学習モジュールの開発

大学生のコミュニケーション能力の改善による学修に関する主体性の獲得や向上

3. 研究の方法

本研究は3年計画(平成23~25年)とし、PDCA サイクルで遂行する。

初年度(Plan)は、Pre 調査及び学習モジュールの内容・教育方法、評価指標・基準の作成を行う。2年度(Do)は、担当科目で学習モジュールを取り入れた授業実施と評価を行う。最終年度(Check-Action)は、履修生の学習行動や意識変容をインタビューや学習ポートフォリオにより追跡調査し、カークパトリックのレベル3(他科目への適用)を検証する。

本研究は、図1に示すようにコミュニケーション能力を自分の情報を伝える力、相手の情報を受け止める力、情報を収集・分析・提案するための論理的に考える力の3つの力に大別する。したがって、それらをバランスよく身に付けるために学習モジュール8種類を開発し、効果的な相互作用により他者との相互理解を深め、コミュニケーション能力の改善をめざす。

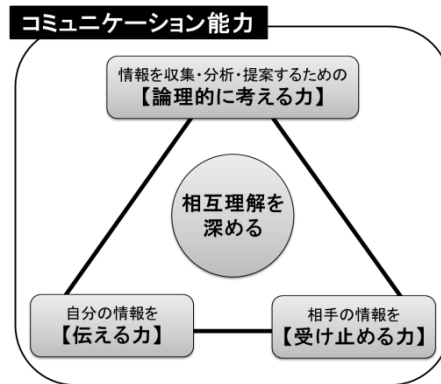


図1 コミュニケーション能力のイメージ

各モジュールは、90分授業で完結するPDCA サイクルを基本としたアクティブラーニング(能動学習)とし、テキスト、ビデオオンデマンドを併せて開発する。学習モジュール例として、「オーディエンス教育」は、聴き手の姿勢や態度が話し手の話す意欲に影響することに気づく。「強制連結法」や「ロジックツリー」は、論理的思考能力を育成する。「道徳的判断」は、コールバーグ(L. Kohlberg)の道徳性認知発達段階に基づき、他者や社会を考慮した道徳的な判断に何が必要かを知る。「マイクロプレゼン」は、表現・伝達能力を育成する相互評価による模擬プレゼンである。

モジュール実施に基づくコミュニケーション学習の成果は、単年度調査ではなく対象者を追跡調査することにより、大学生の学習活動全般を通して他教科での知識理解の認知領域や主体性に関わる意欲などの情意領域に及ぼす効果や影響について検証を行う。そのため、カークパトリックの4段階評価(図2)を採用し、Reaction、Learning、Behavior、Resultsの4段階で行う。本研究の指標や尺度は、履修後の学習行動や意識

変容を検証できるものを開発し、評価基準は他科目やゼミナール参画態度への適用レベル3とする。

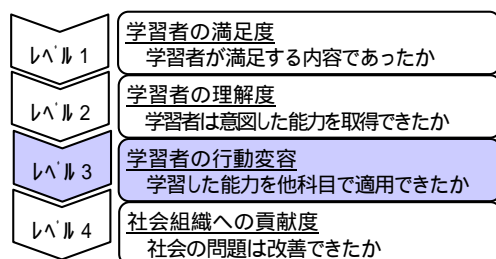


図2 カークパトリックの4段階評価

4. 研究成果

(1) 包括的学修支援

現行のシラバスに準拠し、林が担当するコミュニケーション関連の授業を対象にアクティブラーニング型の学習モジュールを実施した。さらに学習モジュールの実施内容に合わせて、SNSであるFacebook等を活用した協調学習や教育サポーター(Educational Supporter: ES)の活用という包括的学修支援を授業内外で行った。

協調学習

Facebookを学修へ活用する機能的学習環境においては、多彩な学修の交流及び状況が把握できた。さらに、協調学習による様々な認知プロセスは、自己の概念的理解の促進や独自の解の構築・深化ができる一方で、貢献意欲や親和動機等の向上に効果的であった。

教育サポーター

ESは、教員と協力し授業を構成することにより、受講生に対してわかりやすい教材作成やわかりやすい授業を実施することを目的に活動する。

- ・授業内やその前後を中心とした活動
- ・授業外の学習支援を中心とした活動
- ・授業準備を支援する活動
- ・提出物や成果物の整理に関する活動

立命館大学が実施した調査の結果、教員からのES導入の目的と受講生からの授業が良くなった点のそれぞれの上位項目が一致した。したがって、ESの活動は、授業内容の質を高め、受講生の理解を促進させるという役割として貢献した。

Web教材

自学自習を支援するツールとしてコミュニケーション実践のためのデジタルWeb教材(<http://www.td-ict.jp/>)、本研究用として作成した授業Webコンテンツ(<http://hayashi-kyugyou.digiweb.jp/>)を提供した。

(2) アンケート調査の実施

3年計画の最終年度では、通年型カリキュラムの教職課程履修者を対象とし、前期授業では、表1に示す学習モジュールを実施し、

教師に必要とされる教育的コミュニケーション能力の向上を図り、後期授業では、前期に学習したコミュニケーションに関する内容を活かしてマイクロティーチングを行った。

表1 前期授業で実施した学習モジュール

授業回数	学習モジュール
1	ガイダンス(意義・目的、コミュニケーション能力)
2	強制連結法
3	オーディエンス教育
4	イヌバラ法
5	アサーション
6	フォトランゲージ
7	中間プレゼンテーション
8	無言面接
9	ジェスチャー
10	トラストウォーク
11	ポスタープレゼンテーション
12	マイクロプレゼンテーション
13	ロジックツリー
14	ディベート
15	最終プレゼンテーション

コミュニケーション能力の改善が学修の主体性に及ぼす影響や効果の検証には、前期・後期に以下に述べる計3種類のアンケートの実施及びSNSを活用した授業用Facebookグループにおける投稿等の調査をした。回答方法は、4件法(1:まったく思わない、2:あまり思わない、3:やや思う、4:そう思う)や各調査項目に合わせた選択肢、自由記述を用いた。

学習者の情意的領域を測定する質問紙調査調査項目には、B.S.ブルームらの「教育目標のタキソノミー」を参考とし、学習者の学修に関しての情意的領域を低次から高次へと受容・反応、価値付け、組織化、個性化に分類した19個で構成した。

学習者の生活及び学修環境に関する質問紙調査調査項目は、日常生活やアルバイト、サークル活動等の生活環境や包括的な学修環境に関するものを設定した。

学習したコミュニケーションに関する能力や技法の授業外活動への有用性や個の変容・気づきについての質問紙調査前期に学習し習得したコミュニケーションに関する能力や技法が学習や授業外活動にどのように役立ったのか、年間を通して自分にどのような変化や気づきを与えたかを自由記述形式で調査した。

アンケートの調査結果及び分析結果より、協調学習においては各グループ内の学習者間に目的のために協働して学修を進めようとする貢献意欲及び達成動機の上昇に繋がることがわかった。これは、教育サポーターの適切な活用が、グループ演習等の促進や噛み合わせに効果を発揮し、一つの要因となっていることが考えられる。さらに、自己の学修が他の学習者から認められ協調して行動

したいという親和動機の向上に繋がることがわかった。

さらに協調学習や包括的学修支援により、学習モジュールを効果的に実施することが可能となり、学習者のコミュニケーション能力をより高めた。その結果、学修の始発性や統制感、達成感を充実させ、ひいては学修の主体的な意欲という主体性向上への足場かけに有効性が見出せた。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 10 件)

林徳治、コミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす実証研究(4)、日本教育情報学会、2013 年 11 月 10 日、沖縄女子短期大学(沖縄県)

黒川マキ・林徳治、情報教育関連科目を受講する文系学生を対象とした学修に関する実態調査、日本教育情報学会、2013 年 11 月 10 日、沖縄女子短期大学(沖縄県)

林泰子・林徳治、情報教育関連科目を受講する理系学生を対象とした学修に関する実態調査、日本教育情報学会、2013 年 11 月 10 日、沖縄女子短期大学(沖縄県)
北村光一・林徳治、理系の学生を対象とした学修に関する実態調査 - 呉工業高等専門学校を対象として -、日本教育情報学会、2013 年 11 月 10 日、沖縄女子短期大学(沖縄県)

林徳治、タイ国プーケット・ラジャパット大学を対象とした FD に関する実証研究(1)、日本教育情報学会、2013 年 11 月 10 日、沖縄女子短期大学(沖縄県)

黒川マキ・林徳治、大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究(3)、日本教育情報学会、2012 年 08 月 26 日、聖徳大学(千葉県)

林徳治・黒川マキ、大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究(2)、日本教育情報学会、2012 年 08 月 26 日、聖徳大学(千葉県)

林徳治、大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究、日本教育情報学会、2011 年 8 月 21 日、十文字学園女子大学(埼玉県)

藤本光司・照田昇・葛崎偉・林徳治、ものづくりを通じたコミュニケーション演習が主体性におよぼす効果、日本教育情報学会、2011 年 8 月 21 日、十文字学園女子大学(埼玉県)

若杉祥太・小柴慶太・林徳治、受講者数の異なる同一科目における教育効果(その 1)、日本教育情報学会、2011 年 8 月 21 日、十文字学園女子大学(埼玉県)

〔図書〕(計 4 件)

林徳治・若杉祥太・黒川マキ・中村研二・北村光一・原田肇、立命館大学、学校教育演習 活動報告書 教師のための教育

的コミュニケーション活動、2013、223 頁

林徳治・若杉祥太・黒川マキ・河崎拓郎、北村光一・原田肇、立命館大学、教養ゼミナール(53) 活動報告書 情報通信社会におけるコミュニケーション活動、2012、244 頁

林徳治・奥野雅和・藤本光司、ぎょうせい、元気がでる学び力、2011、202 頁、
林徳治・若杉祥太・藤本光司・黒川マキ、立命館大学、教養ゼミナール(55) 活動報告書 情報通信社会と人間のコミュニケーション活動、2011、143 頁

〔その他〕

コミュニケーション実践のためのデジタル Web 教材

<http://www.td-ict.jp/>

林 授業コンテンツ

<http://hayashi-jyugyou.digiweb.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

林 徳治 (HAYASHI TOKUJI)

立命館大学・教育開発推進機構・教授
研究者番号：50228582

(2)連携研究者

沖 裕貴 (OKI HIROTAKA)

立命館大学・教育開発推進機構・教授
研究者番号：50290226

(3)研究協力者

黒川 マキ (KUROKAWA MAKI)

大阪学院大学・非常勤講師

若杉 祥太 (WAKASUGI SHOTA)

滋賀県立堅田高校・講師

北村 光一 (KITAMURA KOUICHI)

呉工業高等専門学校・准教授

林 泰子 (HAYASHI YASUKO)

立命館大学・非常勤講師